塗膜の下から秀作

雨引観音仁王像を修復(上)

奈良県立美術館長 籔内佐斗司さんに聞く

桜川市の雨引山楽法寺の金剛力士像（仁王像）が東京芸術大の籔内佐斗司教授（当時）の研究室の修復を経て、鎌倉初期の仏師集団・慶派の流れをくむ秀作であることが分かった。籔内さんは今年3月に同大学を退任。楽法寺は教授としての最後の年に関わった調査・修復の一つだった。仏像に上塗りされた彩色を剥ぎ取って現れた秀作にまつわる話など、研究室で取り組んだ仏像修復の技法や歩みを「古典彫刻技法大全」（求龍堂、3850円）にまとめた。籔内さんに仏像修復の意義やエピソードを聞いた。

仏像の修復作業に当たる籔内佐斗司さん（東京芸大保存修復彫刻研究室提供）

―素晴らしい金剛力士像だと分かった楽法寺の仏像修復は、何をきっかけに取り組み始めたのでしょうか。当初はどんな仏像であると認識していましたか。修復を進めるうちに、認識が変わったのでしょうか。

「もともとは、茨城県の文化財保護審議委員をされていた後藤道雄先生のご紹介でした。楽法寺は古い仏像もたくさん祭っている名刹で、本尊は平安時代前期の造立という古い像です。仁王門にもなかなか立派な仁王様がいて、修復に向けて調査をしましょうと、お声掛けいただいたのが最初でした。

足のバランス、さえに感動

「古典彫刻技法大全」

■慎重に塗膜剥がして

ただ、後世の修理で分厚い塗膜に覆われてしまっていて、鎌倉時代ごろの像であろうとのことは想像されていたのですが、いわゆる『地方作』的なイメージでいました。

この分厚い塗膜も、像が大切に守られてきた証しではあるのですが、ぶかぶかに浮き上がってしまい像の姿を損ねているということで、除去することになりました。とはいえ、この塗膜の下がいったいどうなっているのか、もしかすると害虫に食われてスカスカになっている可能性もありましたので、慎重に進めました。

ところが、剥がし始めてすぐに分かったのですが、外から見ていたときの想像をはるかに超える素晴らしい彫刻が現れたわけです。これはもう本当に驚きでした」

―金剛力士像を楽法寺から東京・上野の東京芸大に運び込んでから、修復中のクライマックスといえるような場面はどんな感じだったでしょうか。

「基本的に文化財修復というのは地味なものでして、クライマックスというのは難しいですね。先ほど申し上げた、塗膜除去のときの衝撃は大きいものでしたが、あくまで長い修復工程の第一歩なのです。

■像内の納入品に驚き

ただ、御像を解体した際に、中から納入品が発見されたときも驚きました。この納入品は、『永正』『大永』という年号から、今から500年前の室町時代に書かれたものであることが分かっています。

後補塗膜を剥がしたことで、仁王像本体は鎌倉時代初めごろまでさかのぼるものであることが推定されたため、納入品は御像が作られてからおよそ300年後に追納されたものということになります。修理銘札や法華経、摺仏などが入っていたのですが、特に名刹は昨日作ったかのようにきれいな状態で、『実はつい最近修復されたのではないか』と疑ったほどです。

また、もう一つのヤマ場は御像の足回りを修復し、初めて自立させた時です。仏像は家と同じで、たいてい下の方から傷んでいきます。楽法寺像も例外ではなく、室町時代か江戸時代に足回りの大修理を受けていました。ただ、それもだいぶ傷んでおり、足の長さが左右で違っていたりと、やはり御像にそぐわないものだったため、今回の修復で作り替えたのです。古い柱を修理する『根継ぎ』のようなものです。この処置によって、本来の動きを取り戻した仁王像を見たときは感動しました。ちなみにこの時、台座なしでも自立することが分かり、実際の人体に即したバランスのよさを実感しました」

（下は28日掲載）

修復後の阿形像（右）吽形像

雨引山楽法寺　雨引観音の名で親しまれている。587年創建、延命観世音菩薩（国指定重要文化財）を本尊仏として、坂東観音霊場24番札所として知られる。奇祭・マダラ鬼神祭が行われる。境内にクジャクが放し飼いされるユニークな寺。

やぶうち・さとし　彫刻家。1953年大阪生まれ。東京芸術大学大学院文化財保存学教授、同学副学長を経て、2021年から奈良県立美術館館長。著書に、「ほとけの履歴書」（NHK出版）、「仏像礼賛」（ビジュアルだいわ文庫）、「ほとけさまの図鑑」（小学館）など多数。